

『山月記』(何を教えるか)。単なる解説ではなく、  
読みの交流・読みの内省をほかに、主体的に  
小説を読む力をつけるには。実習前、授業  
展開を考えた際に見つけた論文。

これが論文の中で  
一番おもしろい。  
やってみたい。

## 読みを「開く」授業

——山月記の場合——

### I はじめに — 問題の所在 —

山月記の指導について記すにあたり、まず文学、および「読み」に関する基本的な立場を記し、本実践のねらいを明確にしておきたい。はじめに現在の文学教材＝作品に対する認識は「テキスト」論の流れを受けて、作品とは読者の読みによって立ち上がるシステムであり、作品そのものというようなものはどこにも存在しないし、またそれは時間軸上においても常に変容するものとしてとらえられている。またこれを受けて「読む」という行為に対する認識も「読者論」や「受容理論」の展開の流れを受けて、そこには一義的な解釈、伝達されたものを読み取るという正解到達主義的な考えから、多義的な鑑賞、さらには読者側からの創造、生産的なパラダイムへの移行といった傾向が見受けられる。

ところで現在は、日々目まぐるしく変化する国際化社会や情報化社会であり、何をもちて是非を判断するか、あるいは自己とは何か、自己を取り巻く他者、そして世界とは何かということがわかりにくく、最終的には主体自らが具体的な状況下で常によろしく判断するかという力が求められる。したがって、文学におけ

高橋 哲郎

る授業も今までのような研究者や教師が生み出してきた読みを正しい読みとして伝達、理解させるのではなく、自らの読みを他の読みとの関係の中で一つの読みの可能性として相対的に位置づけ、そして、自己の読みと他の読みとの関係の中で、それぞれがなぜそう読んだかを意識化していくことで、そこに自己の枠組みに対する内省と変化を起し、常に新しい変化を促す生産的、動的な場としての「読み」を通して、自己世界を認識し、同時に自己の周囲の世界との網の目をより柔軟に変容させることをねらいとすることが必要となる。

ところで、実際の学習の場においてこのような読者の側になつた自由な読みを認めようとする時に直面する問題は、教室という場で文学教材を使っていった何を教えるかという問題である。というのも先に述べた立場に立てば、作品の「主題」や「感動」といったものは当然教えることができないものであり、指導内容の普遍性、一貫性をそこに見出すことは難しい。また、自由な読みとはある意味では恣意的な読みであり、結果として教師の理想とする読みとはかけ離れたものになってしまうことも考えられるのである。そこで、本稿においてはこのように読みのアナキー

引用出所

高橋 哲郎

『読みを「開く」授業-山月記の場合-』

(「国語教育研究 no.43」page.142-152、

広島大学教育学部光葉会、2000年) p142

李徴に共感できる？できない？

できる

① p.29 L1 「事実は、才能の不足を暴露するかもしれないという卑怯な危惧」という考え方が、もし努力してテストの点数が悪かったら嫌だから勉強したくないという自分の考えに似ている。

② 李徴はプライドが高く、進んで師に就こうとしなかったところが、中二病のときの私が先生や友達に尋ねなかった私と似ている。

③ 李徴の高すぎるプライドがすごくかわいそうで、同時にすごく人間らしいなど思う。実際周りにそういう人がいるし、自身そういう一面がないわけではない。

④ 李徴が過去の自分を冷静に分析している点がすごい。また、気づいたときにはもうどうにもならないというところから人生の残酷さを感じた。

⑤ 自らの意志を曲げずに、固い信念をもつて生きているところに共感できる。

⑥ 賤吏で妥協せず自分の進みたい道に行こうとする意志に共感できる。

⑦ 次に自分がある道を通ったら、故人と認めずに襲ってしまうかもしれないからと、醜態な姿を見せつけようとするところに李徴の思いやりを感じる。

⑧ p.24 L2 「理由も分からず押しつけられたものをおとなしく受け取って、理由も分からず生きてゆくのが、我々人間のさだめだ。」と自暴自棄になっているのは、彼の自嘲癖のこともあり、そう考えるのも仕方ないと思う。

最後までやりきった。

教材で教えることに、自分なりに

取りくみた授業となった。

「書く」「話す」こと「読み」を深める。

⑨ p.28 L5 「おれは詩によって名を成そうと思いつながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交わって切磋琢磨に努めたりすることをしなかった。かといって、また、おれは俗物の間に伍することを潔しとしなかった。」とあるが、目標はあってもそれに向かつて努力をしないという人は、李徴の他にもたくさんいる。

⑩ p.28 L5 「(⑨の引用に同じ)」とあり、積極的な姿勢を外では表しておいておきながら、自身は消極的な姿勢を見せているところに共感できる。

⑪ 友に詩の伝録を願う場面、自分の生きた証を残したいという気持ちがある。

⑫ p.28 L7 「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」はなんとなく自分の中にもある気がした。

⑬ 「尊大な羞恥心」のために自らの才能を磨くことができないところに共感できる。

⑭ 自らのやりたいようにやろうとし、結局上手くいかずに終わってしまうという経験を何度もしているから、李徴には共感できる。

前ポアットの論文を参考に、生徒に李徴の生き方について意見をもらった際の文章。初読後にも様々な意見が出、その後の話し合いでは読みの交流は(正しい)に思われる。

できない

①李徴の人間との交流を避けるという行為は、自分の内心の表れであり、その心の小ささが虎になるということにつながったので仕方ない。

②詩で成功したいと思うのに、なぜそのための努力をしないのかが分からない。

③李徴は人間としての心が消えてしまい、一匹の虎と化すことを恐れているが、もう虎になってしまったのだから、深く、虎としての虎ライフを楽しめれば良いと思う。

④職をやめなくても詩はかける。どうせやめるならやめても困らないように計画を立てるべきだと思う。

⑤李徴は、世間や人と距離を置き、己の内的なる臆病な自尊心を飼いふとらせたために虎になってしまった、というようなことが書いてあるが、私はそうは思わない。人としてふがいなかったから人間ではない姿に変わってしまったのに、強く勇ましい虎になったことが納得できない。

⑥一般人がそう簡単に受かるものではない進士試験に受かり役人となったのに、その役職が気に食わないという理由と詩家になりたいという理由で職を辞したが、私だったらそこまで自分を信頼できないし、職を辞さずに詩を書く。

⑦李徴は家族のことよりも自分の詩業の方を心配していたが、私は一番に家族のことを思うので共感できなかった。

⑧家族のことを後回しで自分のことしか考えられない人だと思った。

⑨p29 L3 「人間だったころ、おれの傷つきやすい内心を誰も理解してくれなかったように」 p28 L10 「おれは次第に世と離れ、人と遠ざかり」とあるが、自分が心を開けなかったから、自分で自分を苦しめてしまったのではないか。尊大な羞恥心をどうして取り去ることができなかったのか分からない。

## 2013年度 教師力アップゼミナール まとめ

2014/01/10

文責：三森

### 1. 今年度の活動内容

#### 【前期】

(メンバー募集 4月初旬～26日)

#### ① 5/7(火)1限

オリエンテーション

自己紹介・前期の活動内容について・北原先生よりアップゼミの資料を基にした講義  
自己アピール表の提出と先生による添削

#### ② 5/21(火)1限

模擬集団面接 1回目

ディスカッション (テーマ：いじめ)

#### ③ 6/11(火)1限

模擬集団面接 2回目

ディスカッション (テーマ：体罰)

#### ④ 6/25(火)1限

模擬集団面接 3回目

教科別ディスカッション (テーマ：授業における ICT 活用)

#### ⑤ 7/16(水)1限

模擬集団討論・フィードバックとディスカッション

(テーマ：いじめの指導)

#### ⑥ 8/1(木)10:00～

採用試験直前 北原先生へのQ&A

#### 【後期】

#### ⑦ 10/8(火)1限

採用試験の報告・後期の活動内容についてミーティング

生徒指導のロールプレイングと模擬授業の2本柱を進めることを決定

(後期からの追加メンバー募集 10/8～10/23)

#### ⑧ 10/23(水)1限

ロールプレイング 1回目

(学級活動、遠足の行先でもめた場合)

#### ⑨ 11/6(水)1限

ロールプレイング 2回目

(たばこ・クラス全体へいじめの事後指導・茶髪の指導と家庭訪問)

#### ⑩ 11/20(水)1限

ロールプレイング 3回目

(万引きの引き取りと家庭訪問・クラス内の喧嘩での怪我・  
クラス全体へ交通マナー指導)

#### ⑪ 12/4(水)1限

模擬授業 1回目

(15分×2人、フィードバックとディスカッション)

#### ⑫ 12/18(水)1限

模擬授業 2回目

(15分×2人、フィードバックとディスカッション テーマ：「質問と発問の違い」)

#### ⑬ 1/10(金)4限

活動の振り返り・北原先生のお祝い

#### ⑭ 1/10(金)5限

教員採用試験経験談を語る会

教職関連の授業で宣伝し、外部からも12人参加

(3人の受験者による経験談・教科別質問タイム)

### 2. 北原先生からのご講評

京大に残る伝統文化である自主性を発揮して取り組みを展開していた。教師は忙中閑で学習しなければならないが、初心を忘れず、自主的に学び続ける教師になってほしい。教師になってから、アップゼミでの場面指導を思い出して、稚拙だったと思えば、取り組みの成果があったということ。今後も、教師を目指す学生が、学力だけでなく実力をつける場として展開していけるとよい。

### 3. 今年度の振り返り・反省

- 学部には教職を本気で目指す人がおらず寂しかったが、こうして定期的に集まり情報交換をすることができてよかった。
- 毎回参加できたわけではなかったが、不定期な軽い参加の仕方でも、毎回有意義な時間を過ごすことができた。
- 教職という同じ夢を持つ人の集まる場所は貴重だった。話すのが楽しく、研究室のいい息抜きになった。また、同じ教師を目指す人でも、それぞれが教育に対して様々な考え方を持っていることを知れた。
- 年度初めには、自分が教師になるというイメージが全く持てていなかったが、周りから刺激を受けて採用試験を突破できた。
- 面接練習は試験本番に活かした。また後期の模擬授業では、自分ではそこそこできていると思っていたものに対して客観的な意見が得られてよかった。

4回生の1年間、代表を務めた「教師力アップゼミ」の活動記録。様々なメンバーがいる中で、集団での学びの場をつくることを学んだ。